

近代の手の平で

——卒業論文の目次について——

梅 正 行

卒業論文の多元と画一

「多元を生きる」という統一テーマの論集に一文を寄せる準備していたときのこと。卒業論文の書き方を学生と考える上で、いくつかの問題点を書きとめておきたいと思いついた。ばらばらな知識をひとつの枠のおさめるといふ卒業論文執筆という作業でも、多元と画一がからんでくるように見えたからだ。創造力や想像力といったことではなく、目に見えるかたちの問題点に、それはかかわっている。

ただし、以下の記述、特に点描部分などは、実際の進行風景に相應の編集を施した結果で、末尾で述べるように、ある学生の発表を聴いての別の学生たちのその場で消えてしまった無言の賞賛や問いを発したいという表情といった反応は再現の範囲にない。

卒業論文を書くことを目的とした演習では、いくつかの意味で多元

と画一がからむ。第一に参加者にある程度まで自由にテーマを選んでもらい、多元を保障する進行の仕方がある。第二に参加者の選ぶテーマにある程度の縛りをかけ、多元よりも画一を優先する進行の仕方がある。どちらも一長一短で、どちらでうまくいくかは、教員と学生のそのときどきの組み合わせによる。

たとえば演習のテーマを英語圏の文学と文化に限った場合、対象を少数に限定し卒業論文を書くとして授業を進めると、授業内での議論は時に深まりもするが、対象に関心の持てぬ学生には苦痛となる。ある作品に対象を限定し、みなで読めば、ある作中人物の言動に対する反応から入り、文脈をその言動の周囲に広げ、最終的には時代と場に広げるといふことも可能だが、事前に頭で想い描くほどこれは簡単にはいかない。反対に、各学生が自分の好みを対象とすれば、授業はとくに拡散し、薄くなる。ただし何を対象にしようとも、共通項というのは自ずと浮かび上がるもので、知らぬテーマの知らぬ内容が思わぬ

役に立つことも、一度や二度ではなからう。

多元を保障しつつ授業を進めるには工夫が要る。そのひとつに目次づくりの時間をかけるというかたちがある。目次づくりは全員でポリフォニックにできるからだ。目次づくりは目次づくりに終わらない。

目次は英語で CONTENTS とか TABLE OF CONTENTS と言いつ。

もうひとつ、学生が卒業論文を書くにあたっては、学生の自主性と教員の発言のバランスが重要だ。学生は、さまざまなものに関心を持っている。あれもやりたい、これもやりたいと言いつ。ひとつのテーマに決めてからも、あれも盛り込みたい、これも盛り込みたいと言いつ。言葉に出さなくとも、そう見える。書き始めの段階ではあれもこれもと望むことと、あれもこれも盛り込めることとは別であることがわからないつ。

とてつもなく大きな構築物を想定し、たとえば作品を読むにあたっては、詳細なノートをつくりはじめる。しかし、英語で四百頁ある小説を扱うにあたり、十頁につき一枚のノートをとつたとしても四十頁のノートができてしまいつ。これが早い段階で実現すれば、その後の作業に入る時間もあるが、四年生夏休みを過ぎたあたりでノートとりをしているようだと、ノートをつくっておしまいということになりかねないつ。作品とノートづくりの細部に埋没し、時間切れになってしまいつ。その意味で、教員は画一性や一元性を三年生の終わり、あるいは四年生の始めて打ち出しておかなければならないつ。学生の自主性や個性をかたちにするために、形式を提示する。

いかに対象と相性がよいからとこいつて、資料の味読に終わつては卒

業論文にならない。対象と相性がよい学生が、対象にのめりこみ、そこから抜け出せなくなつてしまつたということが起こりうることは、あらかじめ考えておいたほうがよい。

論文のタワー型と山型

多元と画一をめぐるさらに別の話題に触れたい。研究者には、年齢が進むにつれ、自分より年上の書き手による論文を読む機会より年下の書き手による論文を読む機会が増えるといったことがある。読者と言い換えてもよい。読者は年齢が進むにつれ、年下の書き手による本に囲まれてゆく。そこで、ときに自分の世界と違つと言つて違和感をもつ読者もいれど、読書から離れる読者もいる。古典にかえりたくなるのは、こついつときだろつ。個人の年齢と時代とこいつたつの時間がつまからめど、古典は老いに至福の場と化す。

論文にはタワー型と山型の少なくともふたつがあるように見える。タワー型はテーマにつき、一直線に進むもの。山型は、テーマはあるものの、紆余曲折するもの。前者は書き手と少数の読者にしかわからず、後者は裾野が広い。学会の紀要でも、発表でも、いつのころからかタワー型のを数多くみかける。タワー型か山型か、分野によるのであろつが、英語圏文学の場合、年長の方々の書いていた山型の論文が懐かしい。そもそも「英語圏」などとこいつけず、昔は「文学」と言つた。山型の論文は、富士山にたとえて言えば、樹海も富士五湖もある。遠景もあれば近景もある。井上靖の『夏草冬濤』を手に沿津から眺め

る富士山もある。冬の新富士駅あたりから眺める、一枚の紫の台形の板のような富士山もある。だれかがこういう富士山を描いたら、人は自然の写しとは思わないであろうほど人工的に見える一枚のガラス板。

ついでながら、学会での発表でここ数年の目立つ傾向が出てきた。画像に頼りすぎる発表が増えてきたことだ。どこかで言葉の世界にもどるのだろうと観ていると、最後まで画像の羅列で終わっていたなどという発表がよくある。文学研究でのこの傾向はいつまで続くのであるうか。

卒業論文の話に入る。卒業論文に山型を求めている学生に酷だ。教員とても、そういうものが書けるのは、何十本に一本かもしれない。タワー型の論文が出来上がるだけでも大きな成果だ。しかしタワーが将来のあるときに山に化けることもありうるということだけは、おりにふれて学生に伝えておく必要がある。ここに目次づくりがからんでくる。

目次づくり以前

卒業論文執筆で目次づくりに入るには、その前に、以下のことが済んでいなければならない。それは人並みはずれた想像力や創造力を必要とする作業ではなく、時間をかけ段階をおって作業を進めれば大学三年生、四年生であれば、だれしもある程度の結果を出せるかたちだ。

そこで本稿の想定読者の第一番目には学生が来る。就職活動等ではしばしば欠席の学生に、卒業論文のためのゼミの欠席時間帯に何が行わ

れているかを示す。説明を欠席者のために何度もしたという苦勞を踏まえてのことだ。次の想定読者は、同じく卒業論文を担当する教員で、互いの工夫を分かち合う。最後は、執筆者自身で、覚書も兼ねている。過去の卒論指導と未来の卒論指導の中間で書いている本稿の内容が、未来においてどこまで有効かという点に気になる。インターネット普及以前の卒業論文、インターネット普及以後の卒業論文、どちらが多元でどちらが一元かは、にわかには判じ難いところがあるからだ。一見、多元を保障するかに見えるインターネットの普及後のほうがタワー型論文を目にするようになりもした。

目次づくり以前に話を戻そう。指導教員と相談の上、テーマを決める。テーマ決定に際し多元と画一のバランスをとる。テーマについて授業で発表する。

学生がテーマを決められるようになるためには、教員がいくつかのテーマを出し、それをとるもよし、別に自分で考えるもよしというかたちをつくっておく必要がある。そこでもいくつかの問題が出てこよう。

そもそもこういう手ほどきをしなくても卒業論文を書いてくる学生がいる。そもそもそのような学生には、目次のつくりかたなどと改まって伝える必要もない。かれらにはそもそも内的動機が備わっている。また、いくら手ほどきをして、なかなか手のつかない学生もいる。

国際教養学部三年生を対象に春学期に行なう演習のシラバスの「授業目的」に「イギリスの文化、文学のなかから各自がシラバスに指定のテーマ（各週の予定に掲載のテーマおよび演習）、募集時点で示

したテーマ「初回に再度プリント配布予定」あるいはそれ以外のテーマから卒業論文につながるテーマを探し出す。これらのテーマを収める時間的枠組みとして、ここでは、イギリスおよび旧植民地の近代について、また参考として日本の近代について研究する」と書いた。

「授業方法」には「第一回授業で、各回につき、担当教員が講義形式を進めるテーマと参加者が発表形式を進めるテーマに暫定的にわけると。その後、参加者各自の着想によるテーマを適宜織り込み、修正を加えていく。参加者希望のテーマが多数出た場合は、担当教員提示の演習のテーマのいくつかを演習に移動する」と書いた。

毎回の予定にはいろいろなテーマと参考文献を挙げておいたのだが、案の定、シラバスに示した予定と最初の授業に学生と立てた予定との間にはいくつものずれが生じた。

テーマは学生が自分で選ぶもよし、教員の提示したものでもよし、としたが、結局、春学期は、教員の示した演習、のシラバスを踏まえての十一ばかりのテーマから、そのいくつかを学生が選ぶということになった。教員の選んだテーマは近代がいかに文学作品に表象されているかというものだ。

近代化を進行形で写し取るイギリス旧植民地の英語小説

今世紀、近代がますます話題となるようになったのは、近代以前から近代に至る過渡期を写し取る英語小説の隆盛も関係している。以前は、イギリスの小説を読み、それは近代そのものの産物だから、こ

ちらも読者として近代のなかにどっぷりとつかっているもので、それは外の世界とは遮断された水族館というか金魚鉢の世界で、ある意味で居心地も適当によく、その金魚鉢のなから出てみようという動きに乏しかったという傾向があったのかもしれない。

しかしイギリス近代小説の見取図らしきものが流布すると、今度はその粗が見えてくる。そこで、イギリスの旧植民地の英語小説に目を向けると、そこには、かつてのイギリス小説の読者としても懐かしい作品群が、さらにかつての、そして今でもだが、日本の近代小説の読者としても懐かしい作品群が無数に乱立していた。複数の社会の複数の近代が浮かび上がってきた。近代は厄介だ。定石的アプローチがありそうでない。

話が漠然とならぬようさまざまな工夫がある。既存の近代論に寄りかかる。あきらかに近代の産物である小説を活用する。分厚い近代論や分厚い小説に対し、良薬苦しという反応を学生がするなら、口当たりよい映画を観るもよしとする、などだ。そうして複数のアプローチを教員が白板に書き付けたものから学生がこれならやつてもよいというテーマを選び出す。以下はその一例だ。第一回のみをそうと記し以後は回数を明記しない。ここから先は個別の作家や文化事象をめぐめる細かい話も混入せざるを得ないが、演習そのものの進み具合の話から逸れぬようにする。かたちは授業点描となる。

点描

第一回。授業のイントロダクションを行なう。順番をじゃんけんして決める。近代というテーマの重さと「じゃんけん」という非近代的決定手段の折り合いがなせつくかという点については、どこからはじめても、最終的には似通った認識にいたるといって楽観主義を採用。

第二回。村岡健次著『イギリスの近代・日本の近代』所収の「近代イギリス民衆教育史の再検討」について学生一名が報告し、議論を行なう。発表者におおきな負担となったが、用語を丹念に調べるところから入り、困難な課題に果敢に挑戦した。日本の公立学校で宗教教育が行なわれていない背景を問う質問が目を引いた。この著書の他の箇所著者がイギリス近代をいつからいつまでと述べている箇所が複数あるので、その確認を次週までの課題とした。イギリスの近代とイギリスのモダニズムを混同することのないように、いくつかの事例を示した。教育を糸口に、いずれどこかの時間に、エマニュエル・トッドの近代の定義への接近をはかる。終了後、学生が出してきたテーマ「アメリカの黒人差別の歴史」について検討する。これをアメリカの知識人たちがアメリカ近代のなかでどう位置づけているかを明らかにせよという課題をつけくわえる。

第三回。村岡健次著『イギリスの近代・日本の近代』所収の「ヴィ

クトリア女王とデイズレーリ」について学生一名が報告し、議論を行なう。報告は年表を中心として行なわれた。その場合、報告が単調にならぬ工夫が必要となる。年表という羅列型の報告であれば、これを英語で作成するという課題も今後の視野に入ろう。学生のヴィクトリア朝への関心の受け皿としては小説が重要だ。オースティン、ギャスケル、エリオット、ディケンズ、サツカレー、ブロンテ三姉妹、メレディス、ハーディを紹介する。作品はどれもペーパー・バックで四〇〇頁から八〇〇頁なので、代表作に絞る必要がある。作品を読み終えたら、ディケンズ・フェロウシップ日本支部のホームページなどで、日本の研究者、また世界の研究者が何に関心を持っているのかを確認する。この関心というのは本国でも日本でも、更新されていく。坂本龍馬が大河ドラマになれば龍馬本の出版が増え、「不思議の国のアリス」の新作映画が出れば、学生が卒論でアリスを採り上げたりするという具合だ。同時代の流れに触発されての軽い好奇心から入っても、カノンは心える。ここで、用語の誤用を回避するため、全員に『オックスフォード英語辞典』の「モダン」、「モダニズム」、「モダニティ」、「モダン」等の定義を確認するという課題を課す。ここまではイギリスの近代にかかわる部分だ。次にアメリカの近代が入ってくる。今世紀になり、ますますアメリカ理解に困難が伴うようになってきた。さらにもうひとつ、アメリカの近代の芸術上の頂点のひとつはボストモダンの小説にあり、近代理解なくしていきなりボストモダンに入ると混乱をきたす。とはいえ作品から入ることによって、そうした混乱も避けられる。ジョン・ドス・パソスの『U.S.A.』、コーマツ

ク・マッカーシーの『血と暴力の国』、ドン・デリーロの同時代小説トマス・ピンチョンの同時代小説は、なまじ近代とかポストモダンといった観念が頭に入っていないほうが理解しやすい。そうした面白さは、学生のほうがよほど鋭敏に感じ取る風だ。演習では古典や古い考え方もカノンというかたちで勉強していくが、それもこれも最終的には今世紀の対象にならなければならない意味がない。その意味で、今世紀アメリカは対象の宝庫だ。

第 回 アメリカ西部開拓におけるフロンティア。学生から出たテーマだ。先住民の穏やかな生活に銃をもった近代が進入。近代進入を空想的に捉えうるテーマと言える。学生一名が報告し、議論を行なう。アメリカにおけるフロンティア消滅後になお「西部」を書き続けて興味深い大作家がいる。かれにあつては「メキシコ」が実はかつての「西部」の延長上にある。馬や動物を愛する牧童が近代社会に倦んで旅に出る。荒野の道なき道を何日も野営しながら進む。兎をとり、鹿をとり、川で愛馬に水をやりながら、進む。やがて国境を越える。越えた先はメキシコだ。しかし、それは、メキシコでありながら、異界とでも呼ぶべき、「近代」から見ると不思議な世界だ。「近代」を捨ててきた牧童が、荒野を経て、非「近代」世界に入る。以上は、コーマック・マッカーシーの『すべての美しい馬』、『越境』、『平原の町』に通底する状況だが、この国境三部作が「近代」に投げかける問題の奥行きは深い。移動や越境が時間の遡及に重なるというコンラッドの『闇の奥』にも比肩しうる世界がこれらの作品にはある。

第 回。『言語都市：ロンドン』（藤原書店）。姉妹作として『言語都市：ベルリン』（同）や『言語都市：パリ』（同）があり、ドイツ語やフランス語を学んでいる学生には広がりが出る本だ。都市を言語の網と捉える発想は英語圏ではトニー・タナーの『言語の都市』にあり、面白い。ロンドン論を文学的に仕上げる場合、シェイクスピア、ジョンソン博士、ディケンズ、モーム、コンラッド、ウルフ、グリーンといくらかでも大詩人、大作家の世界が待っている。

第 回。ヴァージニア・ウルフ『ダロウェイ夫人』。二名がこの作品を選んだ。ウルフは「モダニズム」の作家と称され、このときの「モダニズム」は「現代主義」と訳して当たる。二十一世紀の今から見れば「モダニズム」も歴史の一時期だが、当時は、現代だった。その否定するところはディケンズなどに代表される十九世紀的な俗物主義、物神主義で、そうではなく、人間の「内部を御覧なさい」というのがウルフの主張だ。

二人の学生にはふたつのまとめを提示した。ひとつめは、作家の紹介、年表の提示、全作品の簡単な紹介、『ダロウェイ夫人』の梗概紹介、参考文献の紹介、重要サイトの紹介、日本および他国の学会活動の紹介、日本のウルフ研究者の確認、できれば本国の研究者の確認、そして作品論というまとめ。これはどの作家を扱っても初歩の段階で行なう作業だ。

もうひとつは、映画化された『ダロウェイ夫人』の分析、『ダロウェイ

イ夫人”がらみの映画は大きく二作品。

ひとつは原題通りの『ダロウエイ夫人』。女優ヴァネッサ・レッドグレイブが朝、ウエストミンスターの自宅を出て、「なんと朝」とウルフ世界の定石を演じ、花を買い、ハッチャーズ書店のウィンドウをのぞき、ボンド・ストリートを通って、自宅に戻る。筋にすると、そのようなことが続くが、小説そのものに話を戻し、特にウルフで重要なのは、こうした要約が無意味ということだ。音楽や絵画で要約が不可能なのとよく似ている。そこを越えられるか否かにウルフ理解がかかっている。

国際教養学部の演習は現在同学年九種類ある。その九分の一を英語の教員が担当しているから、演習では「英語を」対象とするが、「英語で」対象を扱うか、という点が問題化されないでもなかつが、ウルフあたりの原文を読んでいると、そうしたことを問題化すること自体が野暮と思えるほど、英語がすばらしい。文学作品がたまたま英語で書かれているというところだ。

第 回。もう一作の映画は『めぐり逢う時間たち』で、これは先のウルフ理解を達成した男性たちによる、ウルフ世界の解釈だ。作品のできもさることながら、付録で展開される男性たちのウルフ理解の深さが尋常ではない。この映画の鑑賞については、担当学生に任せるとして、この作品には、カノンにかかわるもの、過去の重要作品にかかわるものにとって重要な、更新というテーマがかくされている。その点にいたるため、少しばかり、散文的な説明を加えておく。まず、め

ぐり逢う時間たち』は、フィクションであるから、当然のことながら、つくりものだ。この点は動かしがたい。ただし登場人物三人のうち、一人だけは実在の人物だ。

冒頭に登場するのは、その入水自殺から始まる作家ヴァージニア・ウルフその人だ。これを演じるのがニコル・キッドマンで、同じ女優が『ナイン』や『ドッグ・ヴィル』にも出れば、『奥様は魔女』にも出るわけだから、洒落ている。『めぐり逢う時間たち』のニコル・キッドマン演じるウルフはつねに創作上の悩みを抱えている。今、『ダロウエイ夫人』を書いているところで、筆は遅々として一向に進まない。進まないといつては夫レナード・ウルフにあたり、ロンドンに行くといつては家を飛び出す。かれらはリアル・タイムで考えればイギリス・モダニズムの只中にいる。

話は大戦間時代から約半世紀を経た一九五〇年代のアメリカに移る。この時期、アメリカ近代は最盛期にあつたと言える。V・S・ナイポールの描くトリニダードの人々がしきりに模倣したのはアメリカン・ウェイ・オヴ・ライフであつた（『模倣者たち』）。日本とてその例外ではなかつた。昭和とは、戦後、そのかなりの部分がアメリカ模倣の時代であつた。狭い住宅に住みながら、中学校の英語の教科書に、リビング・ルームやダイニング・ルームを見て、英語という科目のありかたそのものに戸惑いを覚えたものだ。その日本の中学校の当時の英語の教科書に出てきそうなアメリカの高級住宅地にひとりの女性がいる。夫がいる。息子がいる。大きな家がある。芝生がある。有色人種は皆無、いるとしてもシャドウ・ワークをしている。ガソリンを撒き散ら

すような車がある。物質的には何一つ不自由がない。その不自由のない女性が寝室でひとりヴァージニア・ウルフの『ダロウェイ夫人』を読み、咽び泣いている。夫はベースボールの試合をテレビで観戦している。こちらにおいてと誘いもする。だが、女性の咽び泣きはとまらず、ベッドは特殊撮影で文字通り血の海となり、女性はおぼれる。イギリス・モダニズム世界でヴィクトリア朝的男性中心主義、物神主義に抵抗したウルフの作品は、アメリカ近代の物質文明の只中で、アメリカ女性に読まれることによって再生され更新された。ウルフの抱えていた問題は解決されぬままだ。女性は夫のもとを去り、ひとり暮らしを始める。幼い息子のその後が、第三番目の女性の話につながる。

この役はメリル・ストリープが演じている。またしても半世紀が経ち、舞台はマンハッタンのアパート。女性がパーティの準備をしている。ウルフの『ダロウェイ夫人』の世界は、結局、二度更新される。学生のウルフの鑑賞には冴えが見えた。これほどの冴えが発揮されるのであれば、ジェイン・オースティンなども、もつと積極的にこちらから勧めてもよかつたかもしれない。芸術としての完成度の高い作品に触れておくことも、卒業論文の重要な課題のひとつだからだ。

第 回。クシュワント・シン『デリー』。『デリー』にあたって、ウルフで触れた作家の紹介、年表の提示、全作品の簡単な紹介、参考文献の紹介、重要サイトの紹介、日本および他国の学会活動の紹介、日本の研究者の確認、できれば本国の研究者の確認、そして作品論という手順が生きる。面白いのは、すでに日本で十二分に完備されたイ

ギリスの作家のホームページが大きなヒントを提供するという点だ。

ところで、チャールズ・デイケンズは、その作品の翻訳のすべてがまもなく出揃つという点で、また、その学会であるデイケンズ・フェロウシップ日本支部が四十年の歴史を持つという点で、シエイクスピアをのぞき、おそらくもつとも日本で紹介の進んだ作家のひとつりだ。

先に触れたそのホームページには、ひとりデイケンズのみならず、クシュワント・シンにも、そして他の都市小説作家にも通じるさまざまなテーマがキーワード化されている。ただし、ここでひとつ問題が生じる。作品と作品論のどちらが先かという点だ。答えは作品が先なのだが、今の学生は巷の情報に圧倒され、下手をすると作品の前に作品論に親しむなどということがある。情報を提供する教員の側も実は結果的にこれに加担し、学生と作品との幸福な出会いを妨げていることがある。

点描を書き続けたらきりが無い。要は、ひとつの方法論で括りきれないという点だ。論文という画一体を意識する授業は、同時に対象の多元性のもつとりとめのなさとの格闘でもある。

秋からの選択

近代以下いろいろなキーワードを取りそろえ学生を待ち構えた三年生春学期ではあったが、秋学期、さらに箍をはずして、多元に軸足を移したところ、ほとんどの学生が自分でテーマを見つけてきた。教員

の示したものでも自分で選んだものでも苦労するというのであれば、自分で選ぶという境地になったのであるつか、三年生秋学期の発表のテーマは、そのなかのかなりを卒業論文につなげるという意図で学生が選んだものとなった。

夏休みに課題をひとつ出しておいた。自分の関心のあるテーマにつき、英語で書かれた参考文献を一冊しぼり、これを読了してくること、英語の本は二〇〇頁前後のもの、という課題だ。結果は良好だった。

学生の選んだ対象を列挙すると、シェイクスピアの作品、不思議の国のアリス』という文学関係がふたつ。これは先行研究がいくらかでもあるから、指導も自己流にはなりにくい。次にナシヨナルトラスト。これも資料探しに苦労はしない。さらに熊のプーサン。一見、童話の世界で終わってしまいそうだが、発表によると作家とその息子の葛藤というテーマもあるようで、奥が深い。息子に買い与えた熊から作品が生まれたということなので、創作行為の源泉というところまでもつて行ける。ロンドンの地下鉄とイギリスで誕生した軽自動車というテーマ。前者はイギリスの公共交通機関と労働者の移動という問題へと開いていく。後者はイギリスにおける自動車の大衆化とそれが人々におよぼした影響という問題へと開いていく。両者ともそこからさらに先がある。

と、学生の出したテーマを手短に並べたが、展開の方向性は簡単には見つからなかった。もっとも展開のしかたを一行で述べられたら、苦労はない。

目次づくり

発表当日の手順はこうだ。まず司会者を決める。司会者が発表者を紹介する。発表者が発表を行う。司会者が全員に質問とコメントを求め、ひとつの質問が出たら、それに関連する質問やコメントもそこで出し、すべてその場で片づける。こうして参加者全員が一通り発言を終える。

そこからが問題だ。発表内容を卒業論文のテーマとすると仮定し、さらにどのようなことが書けば、卒業論文として読者の知的好奇心を満足させるかを話あう。再び司会者が進行をし、ひとりひとりが意見を言う。一巡目と違い、ここは、すぐに意見の出てる発表内容となかなか意見の出ない発表内容に分かれる。意見が出にくいということは、そもそも発表内容がそれを深化するに値しないということもありうる。そういう意味で、先に挙げたテーマは意見の出やすいものだった。あとは発表者本人にどれだけ対象に対する思い入れがあるかという点だけが問題となる。質問の出ない発表内容は同時代の学生の琴線に触れなかったということもありえ、再考を要する場合もある。

さて、この二巡目のコメントが重要だ。発表者はそれを発表中に使ったレジュメにメモする。発表者に白板の前に立つてもらおう。レジュメのなかで、二巡目の質問時間をも通過したキーワードを白板に書いてもらう。さらにほかの参加者が特に二巡目で加えたキーワードを板書してもらう。これらのキーワードを、あらかじめ板書してある「序

論、第一章、第二章、第X章、結論」という箇条書き部分に発表者中心に流し込んでいく。他の参加者も随時意見を言う。こうして目次らしきものができあがる。三年生秋学期の十二月までにここまでの作業が終わった。あとは翌一月の初回授業までに正式の目次をつくっていく。これはクリスマスと正月の間に考えることになる。教室の常識と教室外の常識は違う。暮れ正月の教室外の常識に照らしてもなおその目次が生きていれば、目次の賞味期限として提出時までの最低一年はもちうる。大事なものは本人の関心がどこまで持続するかだ。

掘り下げ

オーソドックスなテーマ、むかしからある作品を対象とするテーマは、テーマを選んだ学生の関心が持続するかぎり、目次づくりで頓挫することはない。問題はやや新しめのテーマだ。たとえばデイズニールにかかわるもの。これは英米文化学科の卒業論文で何度か経験した。国際教養学部でも関心のある学生がいる。自動車業界に関心のある学生がイギリスの軽乗用車に関心があるというなら、その関心は本物であろうし、持続しよう。旅行業界やホテル業界に関心のある学生がデイズニールに関心があるというなら、これも持続しよう。

問題はデイズニールを文化の問題にまでどう掘り下げたらよいかだ。序論はあとで書くとして、各章のどこかにウォルト・デイズニールの伝記の詳述が必要となることは確かだ。これには伝記的方法が有効となる。次に日米のデイズニール説の説明とその違いへの言及がい

る。デイズニールと他のアミューズメント・パークとの違いにも触れたい。これで深まったか。掘り下げはきいたか。また、足りない。ノスタルジーというキーワードを眼鏡にして対象を見直す。アメリカという巨大なるキーワードを眼鏡に對象を見直す。なぜ日本人の大人がデイズニールという場にノスタルジーを感じるのか。ここでようやく日本におけるアメリカからの文化移入の諸形態とその歴史の話に入ることができる。デイズニール訪問の経験者はたちまち文化移入の問題という摩訶不思議な世界の前に立たされ、書くことはあとからあとからと出てくる。

ロンドンの地下鉄の場合はどうか。学生は英語で発表した。発表ごとに英語も内容もよくなっていく。コメントと質問は三巡した。一回目が英語。二回目、三回目が日本語。まずはロンドンの地下鉄に関する具体的質問。次は、日本や他国の地下鉄との比較。最後に、地下鉄ができることで、人の暮らしがそれ以前からどのように変化したが、それによって人の精神生活はどう変化したが、というあたりの問題に行き着く。

演習では回を重ねることに質問の質があがっていくという経験をした。その場で答えの出る問題、少し調べれば答えの出る問題から、容易の答えの出ない問題へと質問が深化した。容易に答えの出ない問題とは、大仰に言えば、そしてある種の楽観主義を抛り所とすれば、対象の抱える問題の本質に近づきつつあるということになる。

書き手がどこまで行けるかは、卒業論文が出来上がるまでだれにもわからない。書いてはじめて、自分の辿った道と眼前の道がおぼろげ

ながらわかるという、その経験の第一歩が卒業論文だからだ。できてきた卒業論文の多くが、できあがって全体像が見えたところで、もうひとつ考察を深めると一段とよくなるものであることが多い。学生もそれに気づくが、もはや時間がない。これは教員が自分で書く論文の場合と同じことだ。ただ、書けばそれで一段落つく。書かなければ、書こうとした内容がいつまでも自分の前に立ちはだかり、次に移れない。書いてはじめて前に進めるといこともわかる。

深めるとか掘りさげるとい作業は楽ではない。実例をひとつだけ挙げておく。ディケンスという作家がいる。研究者たちが、ディケンス理解を深めようとあれこれこころみている。そうしたなかある作家がディケンスを丸のみにしたような作品を書いた。作家の名前はロイド・ジョーンズという一九五五年生まれのニュージランド人。作品のタイトルは『ミスター・ピップ』ⁱⁱ。ある作家への理解を掘り下げた一例として挙げておく。その結末はあまりにもすばらしく、未読の読者のため、ここでは内容を紹介できないのが残念だ。

掘り下げるとはどういうことか、深めるとはどういうことか。それを知るには、小説であれ、評論であれ具体的成功例をひとつひとつ丁寧に読み解き、咀嚼していくしかない。これには時間がかかる。掘り下げの実例だけを列挙しても、どうしてそれが掘り下げであるのかは伝わりにくい。

ましてEメールでこの作業を進めようとしても、もどかしい。顔を合わせてのやりとりでないと、伝わらない。Eメールで卒業論文指導というのは、ある特定のパラグラフの添削なり、完成間近の原稿に限

られよう。それとも、以下の述べる教員の音読中心の進め方よりはるかに効率が悪い。

仮の目次と序論

目次作り話を戻す。三年生の一月の第一週に、課題としておいた目次、つまりそれまでの発表でみなでチェックした目次をもう一度、ひとりひとりの分につき確認する。暮れと正月にひとり考えてみての変更が当然ある。その箇所の説明を中心に授業を進める。卒業論文提出時に目次の内容がさらに若干変わることも想定のうちとする。

一月第二週では、仕上りの早い学生の序文をチェックする。序文としてのかたちが整っていることよりも、何を書きたいのかを探る手立てとする。ときに書いた本人も意識していないようなキーワードに書き手の言いたいことが出ていないかを確かめる。それが一章分のタイトルや、さらに小さな見出しのタイトルとなることもある。

序文のチェックは、教員が音読する。音読によって、文章の不自然な箇所、文体の変化などがわかる。コピーで回すより他の学生も理解しやすい。

教員による音読、他の学生によるコメント、そして教員によるコメントの順で進める。

「される」の頻出はどこから来るのか？

こうして毎回学生の書いてきたものを教員が音読し、全員でコメントする。対象に埋没しがちな書き手に対し、人に通じるとはどういうことを伝える。学生が毎回書けるとはかぎらないから、教員は別の話も用意しておく。

最後に、授業中にいつも気になる点を列挙しておきたい。列挙にとどめ、実際には臨機応変に対応する。悪い例をいくら並べても、悪い影響を受けるばかりだ。よい論文を書く最良の方法は、よい論文を読むことであるとは、動かしがたい事実のようだ。(カッコ)内は対策だが、簡単にはいかない。マニュアル化しにくい部分だ。

資料を読む時間と書く時間の配分を間違える(最初に時間配分の比率を図表にしておく)。「言及される」といった「される」を含む表現を頻用する(「される」が多くないかチェックする)。「である」と「です」を同居させる。どこまでが自分の考えでどこまでが資料からとったかが伝わらない(注のつけかたを学習する)。遠大な計画を立て執筆の時間配分を怠る(「遠大」と「実現可能性」の折り合いを早い段階でつける)。章立てのバランスが悪い(まずは章の頁数を等分にわけておく)。一文内に主語が二ある(音読してみる)。図版や表が多すぎる(資料発見の喜びをそのまま出さない)。図版や表に頼りすぎ説明に工夫がない(文字で表現することを第一とする)。出典が明

記されていない(資料の出典はそのときにメモしておく。あとどこから引いたかわからなくなる)。記述が単調である。引用に振り回されている(引用を短くする)。他の批評家に振り回される(もともと自分の言いたいことは何であったかを確認する)。口語的表現に流れる(論文の表現に慣れる)。接続詞を頻用する(接続詞を使わなくてもうまく流れている文章を読む)。主語がわからない(省略する場合でも一応、主語を確認する)。語彙に工夫がない。書けない(とにかく白い紙の前に、またはパソコンの前に座る)。

問題は尽きない。それはそのまま、教員が日々自分の書きもので苦しんでいる点でもある。

言葉という乗り物による移動の訓練

「卒業論文の目次について」という副題をもつこうした場に書きようのないこともある。建物にたとえて言つと、完成した建物を見ても、建設中の足場は見えない。ましてそこで仕事に携わった人々の現場であらゆるかたちでの言葉のやりとり、まして表情などは図面や文書に残りにくい。このたとえに入ってくる言葉のやりとりには卒業論文の演習を担当する教員どうしの雑談といったものも含まれよう。

それを再現するに、たとえば小説というジャンルがある、と言えば、それは、本稿の点描のどこかで、それこそ目に見えぬものについても考えたある午後の授業での経験をめぐる話へとつながっていく。こう

した運動が億劫になったとき、教員は画一の負の側面の誘惑にさらされる。

註

- i 拙稿「ジャンルの多元性と詩的言語の領分」『多元を生きる』（中京大学文化科学研究所、二〇一一年）。ここでの考察は、その後、「近代を生きる」ことと『多元を生きる』ことの相克について——日本、インド、イギリスの言語表象を参照しながら——というテーマに至り、「近代日本を一九四五年八月以降とする考え方がある。小沢信男は親の買う「お札」を前近代的とし、学校を近代合理主義習得の場と考えた。学校教育を通過することで、個人は近代化し、「近代を生きる」下準備をする。しかし近代化は画一化という側面をぬぐいきれぬため、やがて多元化との相克に至る。本発表では、それぞれのやり方で個人の近代化と社会の近代化を写し取る日本、イギリス、インドの小説という言語表象を題材に、この相克の克服の可能性を探る」と要約される内容で話をする事になった（中京大学文化科学研究所創立二十五周年記念フォーラム、二〇一一年三月二日）。

- ii ロイド・ジョーンズ（大友りお訳）『ミスター・ピップ』、白水社、二〇〇九年。

参考文献

学生が発表時に提示した文献および教員が言及した文献については、現在、卒業論文作成中ということ配慮し、参考文献として掲げること控える。また卒業論文の形式などについては、拙稿「最初の一文を待つということ」卒業論文を書く学生と「国際教養学部論叢」（第二巻第一号）に付した参考文献を参照のこと。